

シュタイナー幼稚園における「メルヘンの語り聞かせ」についての一考察

菊池 誠子

はじめに

日本の多くの家庭や保育の現場で長い間「お話し」は「語り聞かせ(素話し)」,「絵本の読み聞かせ」あるいは「紙芝居」などの形で子どもたちに提供されてきた。そして近年ますます社会が目まぐるしく変化し複雑化する中で、「お話し」が子どもにもたらす効果が見直され,家庭や集団の場で子どもたちが「お話し」に接する機会を多く持つことが重要視されるようになってきている。しかし反面,これらの提供の仕方がテレビやビデオなどのメディアにのみ頼ったり,教育の場においても雨が降ったから今日はお話しでもしようか,と間に合せ的行われることもないわけではない。特に「語り聞かせ」についてはその本来もっている価値ほどに正当な地位を得ていないのではないと思われる。そこで本稿ではその価値を再認識し,子どもたちが最も適切な方法でこれを体験できるよう,「メルヘンの時間」として主にグリム童話などの語り聞かせが毎日の教育プログラムの中に組み込まれているシュタイナー幼稚園の実践例を見ながら,メルヘンが子どもにもたらすものや指導の方法について考察したい。

1 「メルヘン」という呼び名について

シュタイナー幼稚園ではR・シュタイナー(1861~1925)の提唱する人智学の観点から教育を行っている。「メルヘンの時間」はその教育プログラムのなかでも最も重要なものの一つであると言える。「お話し」には,昔話,伝説,民話,神話,創作童話,寓話など様々な種類があるが,「メルヘン」という呼び名によってある種のお話しに限定されるだろう。広辞苑によればメルヘンは「説話文学の一形態。神話・伝説に

対するもので,空想的で驚異を含む物語。童話,おとぎ話など。」であるが実際には場面場面で様々な解釈がなされている。また「グリム童話集1」の中で訳者の高橋健二氏もメルヘンをはっきり定義することはできない¹⁾,としながらも日本語に訳す場合に大きく分けて次の二つを範疇に入れている。一つはアンデルセンなどの特定の作者によって書かれた創作童話であり,もう一つはグリムによって集められた作者不明の民族童話すなわち昔話である。さらにこの二つのうち,古くから伝わって来た後者=昔話をメルヘンの訳語とするのは十分理由がある,としながらも子どものような汚れない空想から発している点で,童話と一般に訳されているのだとしている。ここで言う「十分な理由」については特に触れられていないが,一方シュタイナーはまさにある十分な理由によってメルヘンは昔話(民話を含む)であると位置付けており,これが前者の理由と重複するのではないかと思われる。それによると創作された童話はメルヘンに含まれないということになるが,その理由はメルヘンという言葉の語源が表している。メルヘン(あるいはメルヒェン)は(Märchen)というドイツ語で,古い言葉ではメーレ(Märe)という形で,「報知」,「知らせ」などの意味で用いられていた。シュタイナーは,メルヘンは決して創作ではなくほんとうのメルヘンというものはすべて,そのメルヘンとしての発生の源を太古の時代に持っている²⁾と述べているが,この太古の時代に発生してそこから現代に面々と受け継がれた「お知らせ」がメルヘンの中に存在すると捉えられるのではないだろうか。その「お知らせ」が何であるかを探る時,ヴィルヘルム・グリム(1786~1859)自身が著述した次のことばに注目したい。「この童話集(グリム兄弟が収集した昔話)には,古

代の暗黒にまでさかのぼる、思想と直感とがふくまれている³⁾。」グリムの言う「古代の思想と直感」とシュタイナーの「霊学の観点からメルヘンを語る」ときに、そこに横たわっている人間の魂にとってたえず新しく、独自で根源的なもの⁴⁾とが表面に表れずともメルヘンの底に潜んでいるのではないだろうか。「根源的なもの」とは、人間は偶然によって存在するのではなく、ある使命をもって存在するというシュタイナーの人間観における「人間存在の根源」であり、「人間の本質に属する何か」である。これを幼い子どもはメルヘンのイメージの中に自分の魂のための養分として感じ取るというのである。そしてこのようなメルヘンはたいてい次のように始まる。「むかしむかしあるところに——。」つまり時と場所すなわちいつどこで起こったことかということとはここでは重要な要件ではなく、何が、どのように起こったのかが大事なのである。シュタイナーは、さまざまなメルヘンに表現されているのは、人間が人生の特定の状況の中で遭遇するものでもなければ、人間の限られた体験領域のなかにあるものでもなく、人間の魂がもつ体験の中でも最も奥深いもの、すべての人間にとって普遍的なものである⁵⁾と述べているが、だからこそのように古くから伝えられてきた昔話や民話はそれが一見ただのおもしろおかしい、およそ非文学的な、とてつもなく短いおはなしであっても、古い言葉のもつ意味のとおり多かれ少なかれ何かしらの人間存在の根源に関わる「お知らせ(Märe)」の役目を果たしている「メルヘン」であると考えられるのではないだろうか。したがってメルヘン＝グリム童話とかドイツの国の昔話ということではなく、たとえば日本の昔話である「ももたろう」や「かちかちやま」も、また世界の国々の多くの昔話や民話も、それが古くから伝えられ残ってきたものであれば「メルヘン」としての意味をもつものとして捉えられるであろう。このような意味をもつものとしてシュタイナー幼稚園では「お話し」を「メルヘン」と呼んでいるのである。これに対してたとえそれが文学的な価値の高い名作童話ではあっても特定の作者による創作童

話は、シュタイナー幼稚園においては7歳までの年齢にふさわしい「メルヘンの語り聞かせ」の題材として積極的に用いられることはなく、これとは違った価値観から幼稚園以降の学校(シュタイナー学校)の低学年の教育内容に委ねられている。

2 シュタイナー幼稚園の実践例

シュタイナー幼稚園のメルヘンの語り聞かせは「メルヘンの時間」と呼ばれているが、日本の多くの幼稚園や保育所で行われる「お話しの時間」の持ち方といくつかの点で異なっている。そこで、英国のシュタイナー幼稚園の一つであるキングス・ラングレー幼稚園⁶⁾(1クラス20人程度の3～5才児混合クラスで主副2名の担任で指導にあたる)のメルヘンの語り聞かせの実践例からまず形式的な特徴を項目であげてみることにする。

①事前準備として保育室の中に特別なメルヘンの場を設える

園のプログラムではメルヘンの前は外遊び(11:30～12:10)、後はお帰りの時間(12:30)となっている。幼稚園という集団遊びの場から家庭という場に移動する前の中間地点となる。この時間に一旦気持ちをしずめてメルヘンというもう一つの世界に魂を浸す時間である。シュタイナー幼稚園では現実の目覚めた世界とメルヘンのファンタジックな世界とを分けるために特別な場を準備する。子どもが園庭で遊んでいる間に教師のうちの一人が保育室の一角(多くのシュタイナー幼稚園の保育室は不定の多角形をしていてその一角に敷物が敷かれており、自然素材で創られた季節のテーブルが飾られている)に子どもの椅子を一系列の半円形に並べておく。子どもの気が窓の外に散らないように保育室のカーテンを半分閉じて少し暗くする。これによってそこに普段の遊びの場とは違う特別な空間ができあがる。また半円形に並ぶことによって、どの子も教師と等距離にあり、教師の側からも子どもの顔がよく見え、語り手と聞き手の間にじゃまが入らず直接に向き合える状態になる。

②メルヘンを語る前に

外遊びから帰った子どもたちが年令に関係なく好きな椅子に座ると教師が中心に置いた一本の蜜ろうのろうそくに灯を灯す。すると甘い香りとともにほの暗い保育室の中に一点の灯りがともり、そこに子どもたちの意識が集中し、活動的な生活の場からメルヘンの世界へと導かれていく。それから教師は素朴な、シュタイナー幼児教育独特の五度音程を多く含んだペンタトニックのメロディー(譜例1)を静かに歌って(ときにはライアーやグロックンシュピールを奏でて)夢見心地の世界へ子どもを誘う。

③メルヘンを語る

教師は子どもたちの顔を見ながら静かに語り始める。この時のメルヘンはイギリスの昔話から「三匹の小ぶた」。シュタイナー幼稚園では一つのお話を2～3週間にわたって毎日、同じ時間にくり返し話される。語り手は主観的な感情を込めずに、またストーリーを省略することなく(3番目の小ぶたと狼とのかぶ取り、りんご取り、お祭りに出かけるやりとりを含む完全な形で)物語の筋を語っていく。こわい狼が出てくる場面でも特別に感情を込めて語ったり、声色を変えたり、またおおげさなゼスチュアを入れて語ったり、大きな声を出したりということがない。教師が淡々と物語の筋を追っていくことで子どもたちは自分の世界をじゃまされずにイメージーションを広げることができる。どの子も真剣に聞き入っているのをみると3, 4, 5才の区別なくそれぞれがそれぞれの世界をつくってこのメルヘンに浸っているのがわかる。教師が自分の感情を押し付けずひとりひとりのこどものイメージーションを大切にするという姿勢がみられる。

④メルヘンを語った後に

ストーリーの終わりがメルヘンの時間の終わりであり、ここで教訓的な解説をしたり、感想を聞いたりすることはない。ろうそくの灯を消して簡単なうた遊びや手遊びをしながら少しずつメルヘンの世界から現実の世界へ

戻っていくと、やがてお帰りの時間となりひとりふたりと家族がお迎えに来てひとりずつ別れの挨拶をして順に帰っていく。(全員そろってお帰りの挨拶とかはない。)

以上がシュタイナー幼稚園における「メルヘンの時間」のプログラムの進め方であり、これは日本のシュタイナー幼稚園も世界のシュタイナー幼稚園もほぼ共通しているものである。そして「メルヘンの時間」に共通するさらに最も重要なことは教員がシュタイナーの人智学の基礎を学び、子どもの本質というものを体・魂(心魂)・霊(精神)の3つの側面から理解して、「メルヘンの語り聞かせ」が子どもの本質にとってどのような意味をもつのかについての認識をもって指導していることであろう。ではこの意味とは何なのかを次に考察する。

3 メルヘンが子どもの内面に育てるもの

メルヘンは口伝によって形を変えながらも何十年、何百年と伝えられ現在に残っている。それはなぜ途中で消えることなく残ることができたのだろうか。メルヘンが古くからの何かしらの「お知らせ」を含んでいることは前に述べたが、それだけでは十分な理由とならない。「お知らせ」を受け取る側の能力も必要なのではないだろうか。グリム兄弟の弟のW・グリムは「子どもと家庭とのメルヘン」の中で「それは(メルヘンは)メルヘンへの活発な感受性が存在し、生活の混乱によって消されてしまわないような空想が存在したようなところにだけ定着した⁷⁾」と述べている。メルヘンに対する感受性が豊かで空想が存在するような場所とは、一つは機械文明の進んだ社会よりは自然が多く残っている社会であり、また別の見方をすれば大人の心の中より子どもの心の中を指しているのではないだろうか。子どもの心にはメルヘンからの「お知らせ」を受け取ることのできる鋭い感受性があり、しかもそれは大人のように現実生活の煩雑さによってかき消されるものではない。むしろ子どもの心の中でこそ生き生きとなりうるものであろう。そのような可能性をもっているの

が子どもであり、子ども自身も本質的にメルヘンを必要としているのだと思われる。シュタイナーは子どもの本質について、「子どもの中では人間の本性がより根源的な仕方ですべて存在、全生命と関連している。——子どもの中では、霊の力を顕示するものが、より自由に活動している⁸⁾。」と述べる。ここでいう「霊」とは人間の本質の中にある三つの側面、「体」「魂」「霊」の一つであり、人間が事物を神的な態度で観るとき、彼に示されるものである⁹⁾。従って「霊の力」とは、同じ人智学の観点からメルヘンの解釈に関する研究をする J. W. シュナイダーのことは借りれば「文明が進むにつれて、そのような根源的な状態から徐々に遠ざかってきたところの人間がかつて、太古の時代、大自然との結びつきが強かった時代には自然の中に神々や精霊のはたらきを見ることができたような、存在の秘密、生命の秘密についての本能的な叡智¹⁰⁾」を指している。そしてそれは機械文明の進んでいない大自然が多く残っている地の人々には今でも時おり見られるような、しかしながら現代人においても心のどこかにその名残りをとどめているようなものであり、特に子どもは生まれたばかりの時にはそのような本能的な叡智をまだ多少なりとももっているのである。もちろんそれは子どもから大人へと成長する過程で少しずつ薄れてゆき、そのためにもすれば多くの大人は知的に解釈しようとしてかえってメルヘンの真の意味を受け止めることができなくなってしまうこともある。しかし子どもは自らがもっている叡智によってこれを苦勞なく受け止めることができる（わかる）のである。この「わかる」力は、子どもの本来の力、どの子どもにそなわった根源的な力である。このようにメルヘン自体が保持している根源的な力とそれを必要としかつ理解できる子どもがもつ本質的な力とによってメルヘンは存在の意味をもち、子どもはこれによってそれからの人生を生きていく上での助けとなる力を貯えるのである。シュタイナーはこのようにメルヘンを子どもの心情に最も適した表現形式である、すなわち霊的ないとなみにおけるもっとも深遠なものをもっとも素朴な仕方

で現したのがメルヘンであるとして、子どもの魂にとってそれ以上に大きな喜びを与えるものはないと述べている¹¹⁾。

さて子どもはメルヘンを通してさまざまな「心を動かす出来事——真なるもの、善なるもの、美なるもの等」に出会う。そこで次に一つのメルヘンから子どもがその中でどのような「心を動かす出来事」に出会い、そこから何を受け取るのかについて考察をすすみたい。例としてあげるのは日本の昔話「やまなし¹²⁾」である。ストーリーは、「病気の母親のために三人の兄弟が順番に奥山のやまなしを取りに出かける」というもので兄弟の上の二人、たろうとじろうは途中に出会うばあさま、笹の葉、巣作りをする鳥、ふくべ(ひょうたん)、の助言に耳を貸さなかったため、沼の主(おん)に食べられてしまうが、末のさぶろうは助言を聞いてやまなしを手に入れ、沼の主から二人の兄を助け、やまなしを食べた母親の病気もよくなってめでたしめでたし、という内容である。このメルヘンを教訓的な観点からだけ見ると次のような点が含まれていることに気付く。その一つは「病気の母親にやまなしを食べさせてあげようという親孝行な心が最後に幸福を招く」ことであり、ほかに「他人の言うことに耳を傾けないと困った結果に陥る」「困っている人に手を差し伸べるとそれがのちに自分にとって良いこととして返ってくる」ことなどである。しかしこれは大人の側から見た知的な理解であって、このメルヘンが子どもの心に一番残したいものではない。幼い子どもが「心を動かす出来事」として出会うのは少なくともそのような教訓では全くない。結果的によい教訓として子どもの心に残ったとしてもそれがメルヘンの真の目的ではないのである。まず兄弟がはじめに出会うばあさまの「このさきの三ぼんのわかれみちにたっている三ぼんのさきのうち、かぜになって『ゆけっちゃ かさかさ』というほうにいきなさい」という不思議なことばに注目しよう。謎めいた三ぼんの別れ道と風と笹の葉が奏でる快いリズムミクミクな言葉はもうそれだけで十分子どもの心を捉えることであろう。そしてそこへ着くと確かにまん中のささが

『ゆけっちゃ かさかさ』と鳴っていて、右と左のさがが『ゆくなっちゃ がさがさ』と鳴っている。何とも不思議な光景ではないだろうか。風にふかれてさきの葉が鳴る音は大人の耳には「がさがさ がさがさ」としか聞こえない。したがって大人は、笹の葉は本来しゃべらない、だから『ゆけっちゃ かさかさ』というの子ども向けの作り話として思い付かれたものである、と考えるかもしれない。しかし確かにその通りの言葉を話したのではないにしてもこう考えられないだろうか。大自然は我々人間に多くの真実を語っている、あるいは教えてくれている、と。我々の方がしっかりとそれに耳を傾けることをしているかどうか、と。それを現代社会において人間が自然から遠離るほどに新たな自然災害や病気が増えたりすると言う事実が示している。もし大人がかつて子どもであった時にしっかりとメルヘンを体験しているならこの自然がものを言う（真実を語る）ということが単なるたとえ話しではないということに容易に気づくであろう。だからこのメルヘンの中で子どもたちが「ゆけっちゃ かさかさ」あるいは「ゆくなっちゃ がさがさ」と聞こえる体験を本当にあったこととしてすることが重要なのである。そして何故かたろうは右の道へ、じろうは左の道へと入って行ってしまい、自らの身に危険を呼んでしまう。このようにしてメルヘンの聞き手の子どもはたろうの、じろうの、そしてさぶろうの選んだみちをともに辿り、笹の葉の時と同じように、鳥が巣を作りながら奏でる音『ゆけっちゃ とんとん』、さらに木の枝にぶらさがるふくべが鳴る音『ゆけっちゃ がらがら』に耳を傾ける。三人とも最後に辿り着くのは大きな沼で、そのほとりにやまなしの木があり、さぶろうが登ろうとする時だけやまなしが『ひがしの えだは おっかないせ、にしの えだは あぶないせ、きたの えだは かげうつる、みなみの えだに のぼりんさい、ざらんざらん』とうたって教えてくれる。これら大自然の中にあるさまざまな音に耳を傾けるときに心に響いてくるものを子どもは真実として感じ取りながらストーリーに没頭する。人間が自然

と最も近い存在であることは創作ではなく真実であるからこそ、このメルヘン体験は子どもにとって「心を動かす出来事」となりうるのである。そして突然の沼の主の出現や、ばあさまのくれた赤いかけわんで汲んだ水をのんで生き返った兄たち、やまなしを食べて病気が治った母親、など次々と起こる出来事が、理屈ではなく子どもの心を動かしていく。しかもここに出てくるばあさまも鳥もどんな姿形をしていたのかとか沼の主さえも全く正体不明であるにもかかわらず、そんなことは一切おこまいなしなのである。K・V・ハイデブラントがその著書「心と体の成長」の中で「童話の中で活気を与えるのはそのストーリーそのものではなく、イメージの連続である。イメージがここに語りかけ、隠れた力を刺激する¹³⁾。」と述べるように、子どもはストーリーの因果関係、すなわちこうしたからこうなったということにではなく、そこで外的に出会うものから沸き上るさまざまなイメージを楽しみつつ知らず知らずのうちに内的な体験として自らの魂の中に人間の根源に関わるもの、これから成長して大人になっていく時に大きな助けとなるものとして貯え、これを魂の栄養としてその後の人生を生きていく時に出会うさまざまな困難や問題点に立ち向かう力としていくのである。シュタイナーは「メルヘンや伝説は、人間が生まれた時に人生遍歴に備えて故郷から授けられる善き天使である。それは人生の遍歴を通じて、人間の忠実な伴侶である¹⁴⁾。」と述べているが、メルヘンの真の価値はこの言葉で表されているのではないだろうか。

結びにかえて

以上のようにメルヘンと子どもの間に横たわる「根源的な力」を見てくると、シュタイナー幼稚園における「メルヘンの語り聞かせ」は「絵本の読み聞かせ」とは大きく異なるものであると言えるのではないか。よい絵本は入念に計画された巧みな絵と豊かな表現による文の組み合わせとしての芸術的な価値を伴ったものであるのに対し、決まった絵を持たない語りは肉声が語るストーリーの中に現れる様々な事物や現象

が個々の子どもの心に異なるイメージをもたらす「心を動かす出来事」としての価値をもつものである。W・グリムが述べるところの「メルヘンは、それがよいか悪いか、文学的であるか、無趣味であるかを考えず」「理由無しにそれを喜び、愛せずにはいられない」もの¹⁵⁾である。しかしこのようなメルヘンを幼稚園のように複数の子どもを対象として語る場合、教師は取り扱う方法（メルヘンとどのように向き合いどう語るか）や、子どもに与える時期（どの年齢にどんな内容のものを与えるか）については特別の配慮をする必要がある。絵本であればまず絵本の選定そのものに心を砕かねばならないように「メルヘンの語り聞かせ」に際して語り手（教師）が細心の注意を払わなければならないことは何か。それはまず教師の「生き生きとした語り」にあるだろう。生き生きと語るためには教師の真剣な取り組みと事前準備が必要である。語り手はまず自分の声に耳を傾けるべきである。声の値うちは高低、強弱、速度、リズム、音色にあるのではなく語り手の心にある。声にも目のように語り手の心を映し出す鏡のような効果がある。教師が時間の埋め合わせとして、あるいはどうせ子どものお話だからと、安易な気持ちで語れば子どもはそれを見抜くであろう。語る方法もシュタイナー幼稚園では教師がメルヘンを「淡々と」語ることに注意を払うが、これは決して無表情に語るということではない。淡々と、しかし伝えたいという気持ちをもって語ることで、とくに「むかしむかしあったこと」を語る真摯な響きが必要とされる。登場人物によって声の調子を意図的に変えることもなければ、逆に絶対に変えることがないように努力する、ということもない。話し手がこの話しを子どもに聞かせたいと心から思い、自分が語るメルヘンの中の出来事を心底信じてことができれば自然で無理のない抑揚が声に表れるであろう。自分自身が子どもと同じようにお話の世界に入り込んでそこで起こっている出来事を体験し、喜びや楽しみを共に味わうことができることが大事である。もしそのために必要なら前述「やまなしもぎ」にでてくる笹の葉の声ややまなしの

うたを五度を含んだペンタトニックのさりげないメロディにのせて歌ってもよいだろう（譜例2）。くり返されるメロディが子どもの心に快く響くように。またメルヘンの解釈についてはK・V・ハイデラントが次のように語る。「教育者は、くりかえし童話の中に沈潜して、童話がさきやきかけるものに耳を傾けること。童話を知的に解釈することを避け、童話を語るにあたっては、語るものの態度と雰囲気全てである。それがうまくいくと、子どもは喜んで、童話の舞台である霊的な領域にはいっていく¹⁶⁾。」自分が語って聞かせようとするメルヘンをくり返し味わい、何度も声に出して語ってみることによってストーリーの根底にある「真実」が見えてくる。もちろんその「真実」を子どもに解説する必要は全くないが大人がそれを信じて話すことができればそれが声や態度や雰囲気に表れて子どもに伝わるのである。前述のグリムの「直接心に話し掛ける声」とはそのような声ではないだろうか。そのための努力をすることは多くの時間と根気を要するがそれがメルヘンを語る者の務めであるし、その成果は十分にあげられるであろう。そうすれば人の声は千差万別であるが同じメルヘンを語るにしても語り手が違っても同じ効果をもたらすことになる。たかが子どものお話と安易な気持ちで臨めば、子どもは真剣に聞いてくれないだろう。また、教師の心の中に自分が幼い頃に聞いたメルヘンが定着していればそれをもとに最も自然に語りができるかも知れないが、現実には新たに本を読んで不確実なところを覚えたり、全く新しいメルヘンを覚えて語るという必要もあるだろう。その場合、ストーリーに忠実であることはもちろん必要であるが、1字1句にこだわるのではなく、いかに自分がそのメルヘンを信じて話すことができるかが鍵となるだろう。おわりに自分の「語り聞かせ」が子どもの心に直接語りかける声となったかどうかを知る方法についてであるが、「7歳ぐらいまでの子どもに語って聞かせる物語や童話は、喜びや新鮮な感動や、笑いなどを産み出すことで十分目的が達せられる¹⁷⁾。」とシュタイナーが語っているように、評価は語り終えた後の子どもの

表情にあらわれているはずである。

以上のように考えてくると、幼児期に多くのメルヘンを聞いて育った子どもは成長する過程で様々な困難や問題点にぶつかった時に問題解決の糸口を自らの魂の中に見つけることができるであろう。本稿においてはシュタイナー幼稚園の例から述べてきたが、子どもの本質というものから捉えた場合それは世界中の子どもに通じるものであると言える。同様にシュタイナーの幼児教育の他のプログラムについても様々な角度から研究を続けることによって教育の効果の新しい一面が見えてくるであろう。合わせて彼の教育の根底にある人智学を研究することが今後の課題である。

注

- 1) グリム兄弟編 L・デーネッケ監修 高橋健二訳 「グリム童話全集1」 小学館 p.474
- 2) 同上書 p.476
- 3) R・シュタイナー著 高橋弘子訳 「メルヘン論」 水声社 p.66
- 4) 同上書 p.8
- 5) 同上書 p.12
- 6) Rudolf Steiner School Kings Langley に付属する幼稚園。実践例は筆者による一週間の観察参加記録(1998.3月)に基づく。
- 7) グリム兄弟編 L・デーネッケ監修 高橋健二訳 「グリム童話全集3」 小学館 p.485

- 8) 前掲書 R・シュタイナー著 高橋弘子訳 p.46
- 9) R・シュタイナー著 高橋巖訳 「神智学」 イザラ書房 p.33
- 10) J・W・シュナイダー著 高橋明男訳 「メルヘンの世界観」 水声社 p.219
- 11) 前掲書 R・シュタイナー著 高橋弘子訳 p.45~47
- 12) 平野直・再話 太田大八・絵 「やまなしもぎ」 福音館書店
- 13) K・V・ハイデブラント著 西川隆範訳 「子どもの体と心の成長」 イザラ書房 p.158
- 14) 前掲書 R・シュタイナー著 高橋弘子訳 p.49
- 15) 前掲「グリム童話全集3」 p.485
- 16) 前掲書 K・V・ハイデブラント著 p.162
- 17) R・シュタイナー著 高橋巖訳 「霊学の観点からの子供の教育」 イザラ書房 p.37

参考文献

- ・クリスチアーネ・クーティク著 森章吾訳 「遊びとファンタジー」 水声社
- ・スーゼ・ケーニツヒ編著 高橋弘子訳 「幼児のためのメルヘン」 水声社
- ・高橋弘子著 「日本のシュタイナー幼稚園」 水声社
- ・R・シュタイナー著 西川隆範訳 「人間理解からの教育」 筑摩書房
- ・R・シュタイナー著 西川隆範訳 「シュタイナー教育の実践」 イザラ書房
- ・E・M・グルネリウス著 高橋巖・高橋弘子訳 「七歳までの人間教育」 フレーベル館

譜例1 Mother of the Fairy Tale (N.Foster 曲)

Moth - er of the fair - y - tale, Take - me by your sil - ver hand,
 Take me in your sil - ver - boat, Sail - me si - lent - ly a - float,
 Moth - er of the fair - y - tale, Take - me to your shin - ing - Land.

※メルヘンへ誘うペンタトニックのうたの一例としてあげた。実際に幼稚園で歌われていたものとは異なる。ささやくようにしずかにうたう。

譜例2 「やまなしもぎ」より

A ささのは、とり、ひょうたんのうた(菊池誠子 曲)

ゆ けっ ちゃ か さ か さ ゆ く なっ ちゃ が さ が さ
 ゆ けっ ちゃ と ー ん とん ゆ く なっ ちゃ と ー ん とん
 ゆ けっ ちゃ が ら が ら ゆ く なっ ちゃ が ら が ら

B やまなしのうた(菊池誠子 曲)

ひ が し の え だ は おっ か な い せ
 に し の え だ は あ ぶ な い せ
 き た の え だ は か げ う つ る
 み な み の え だ に の ほ り ん さい
 さ ら ん さ ら ん